

蛇の話（二話） = = = 三州横山話より

両頭蛇

両頭蛇という奴は、蛇が蛇を吞んで、吞まれた奴が、吞んだ方の腹を食い破って頭を出して出来ると言います。この蛇を人間が見つけたときは、中央から二つに切ってやるものだと言います。

横山の山口豊作という男が、相知刈というところの山で仕事をしていると、傍で、縞蛇の大きな奴が、同じ大きさの山カガシを、半分ほど呑みかけていたそうですが、一日仕事をして、夕方帰りがけに見ると、まだ全部のみ切らないでいたそうです。蛇が仲間喰いすることは珍しくないと見えて、ある年、藪坂というところを通りかかると、丈三寸ばかりの小蛇を、同じ山カガシが、頭から呑みかけているのを実見したことがありました。また子供の頃、雨乞いをするとて村の弁天の池の水を替えて、岸へ上がって休んでいると、烏蛇の四尺ほどもある奴が、同じほどの縞蛇を追いかけて行くのを見たことがありました。

トカゲを追う蛇

私が少年の頃、村の寄木というところの道を通りかかると、道に沿って赤土を掘り取った跡に、青大将が、赤土の面に頸を突っ込んでいるのを見かけ、不審に思って二、三間離れた場所から見てみると、蛇の首から五寸ばかりはなれたところの土がポンと跳ね上がって、そこから一疋の大きなトカゲが飛び出し、道に向けて走って来ました。蛇もあとから追って来て、幅二間ほどの道を横切って、あと二尺ほどで、反対の側の草むらにトカゲが逃げ入るかと思うとき、私の眼にもトカゲが跳ね上がったと思われましたが、そのままトカゲの姿が見えなくなりました。蛇も見失ったと見えて、そこに留まって、頸を高く上げたまましきりに胸の辺りを波打たせていました。私にも、トカゲが草むらの中へ入ったようにも思われないので、不思議に思ってよく見ると、トカゲは体を一つ回転して、蛇の胸の下に、腹の方に頭を向けてこれも胸を波打たせて、じつとすくんでいましたが、蛇が今一寸ほど動けば腹がトカゲの頭に触れるところです。危機一髪とでも言いましょうか、何とも言えずこの争いが怖ろしくなると、そっと足を後ろに運んで逃げ帰りましたが、しばらくしてから再びそこへ行って見たときは、もう何もいませんでした。